

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一四一五二號）
昭和二十九年四月二十八日通商省特別授受承認第三五二號
昭和三十年七月二十五日印刷 昭和三十年八月一日發行

第二十一卷

第八號

淨土



八月號

卷

頭

言

八月というと原爆記念日が連想される。記念日と名のつくものに余りいいものはないが、その中でも、最も悲惨で後味の悪いのがこの原爆記念日である。新聞では、原爆と並べて、原子力平和利用を大きくとり上げている。原爆の悲惨さをこれで幾分でもカバーしようとする政治的意圖かとも考えられる。大體、科學とか學問とかは、その本來の使命が「平和」であり、「人類文化の向上」にあるのであるから、「原子力平和利用」なんて、ことさらに平和に「利用」することが土臺まちがつている。「利用」したのは戦力の方へであつて、その反對ではない筈である。

こゝで考えられることは、人間の力とか意圖とかというものも、その進む方向をまちがえると、とんでもないことになるということである。火薬も花火の材料に使われれば、江戸の花として、數十萬の人々に一夕の涼味を與えるが、一朝、まちがうと、あたら貴い生命を一瞬のうちに吹きとばしてしまう。楽しい旅行も、一寸した不注意から、諦め切れぬ悲劇となる。すべてこれ、人間の力が、その本來の方向に確進していない證據である。華嚴經の偈の一節に

牛、水を飲めば乳となり

蛇、水を飲めば毒となる

智者、學べば菩提を成じ

愚者、學べば生死を成ず

とある。味讀すべきである。(竹中)

浄土——八月號——目次

木槿の花が咲く、……吉田絃二郎(1)

宗教人ハイライト

以八上人(上)……大橋俊雄(22)

信仰に生きる人々……昆野秀賢(10)

めぐり來た悲劇の思出

……杉本信雄(18)

宗教入門(4)……佐藤賢順(4)

ノイローゼと宗教……高瀬廣居(12)

愛嬌のある幽霊……梅津和夫(16)

尼將軍……鶴田湛泉(25)

木槿の花が咲く

吉田 絃二郎



木槿の花が咲くころとなつた。

木槿の花を見ればさまざまのことを思い出す。

恰度木槿の花の咲くころであった。京都を立て、木津川をさかのぼり、伊賀上野に芭蕉翁の故郷塚を訪づれたのは。

愛染院という、きわめて落ちついた古刹の墓地の奥に苔むした故郷塚があった。

愛染院からさらに、昔の城下町のおもかげを残した上野の町を通って、町はづれの糞虫庵みおむしあんをたづねた。

その時、伊賀上野驛から、傭った車夫がトルストイに似た老人であったことを今でも思い出す。大きな犬が先に立って車を挽くのも珍しかった。

信仰心のあつい老人と見え、時々つぶやいているので、耳をかたむけるとお念佛を唱えているのであった。

伊賀上野驛から町までたどりつくには、昔城の在ったという山のふもとまで、登り坂になっているので、その

間だけ車を下りようと言ったが、老車夫は「そんなことをしては車引きの冥利に盡きます。」といって、車を留めてくれない。そしてさゝやくように念佛をとなえる。

客を乗せてその坂道を上ることができるほど、からだが達者なのも佛さまのおかげだと思っているらしい。

木槿の花が埃を浴びて咲いていた。

その後幾年か経って伊賀上野の山の上に古城に摸した城が建てられたそうだが、あの老車夫はどうしていることであろうか。或は靜かに地下に眠ってしまったであろうか。

それにしてもかれがさゝやいていたお念佛だけは今もなおわたくしの耳に残っている。

K君は大學卒業後、伊豆の温泉地で、そこに別荘を持

っている東京の富豪の家庭教師をつとめていた。

その温泉地は北伊豆のさびしい所で、湯治客といつては日に數人が、ガタ馬車で送られて來る程度であつた。

K君は時々、教え子である坊っちゃんのお伴をして溪川に釣りに出かけなければならなかつた。鰯はやが釣れすぎるほどたくさん釣れた。

K君にとってはあまり多く魚が釣れるのが惱みの種子であつた。

K君は參州生まれで、子供のころからきびしく殺生を戒められて育つて來たのだから、坊っちゃんのお伴をして魚を釣りにゆくことはすこぶる苦しいことであつた。

そこでK君は魚が釣れるたんびに靜かにお念佛を唱え

ていた。殊勝な心がけだと思った。

つい、このごろのことであるが、テレビに生きた黒鯛を刺身にして、まだ筋肉がびくびく動いているのを客に喰べさせているところを映していた。男の客も女の客もよろこんで笑いながら魚を食っていた。

それを見ていると、生きた魚を食っている客が、男女の鬼のように感じられた。

その次ぎには大きなすっぽんの首を切り落し、血を碗に受けて、客に飲ませていた。あんな、残酷な情景は決して一般に公開すべきものではない。

わたくしはかつて伊豫の新居濱に行ったことがある。

海岸には木槿の花が咲いていた。

旅館の前が潮入りの川になっていて、川の彼岸は荒涼たる葦の原になっていた。

その葦の原の片隅に屠殺場があって、毎朝數頭の牛が川を渡って屠殺場へ引かれて行った。

たいていの牛がその川の岸まで来れば、それと感ずるらしく、川を渡るまいとしてあばれる。

男たちは棒を振り上げて牛をなぐる。わめきつゝ、哀願しつゝ、ついに觀念しつゝ川を渡ってゆく姿を見ればいかにもあわれである。

なかには最初から、それとさとしてか、引かれるまゝに引かれてゆくもある。それと知って眼に涙を浮かべて柔順に川を渡るのもあるといふことであつた。

人間は、他の畜生を殺すことを、ゆるされている筈はない。

若い人達に語る
宗教入門

第四講 宗教的知性と絶対の愛

佐藤 賢 順

智慧と慈悲

初めに書きましたように、宗教は日常一般の人間的な生き方を自己批判して、それを超え出でて、人間以上のものに依り所を得て、心の安らぎを得ることでもあります。そこから眞實の人生が開かれるのであります。では、それは如何なる道によつて達せられるかといえますと、智慧を磨き、慈悲を行ふることによつてであります。智慧と慈悲とは宗教生活の骨髓をなしております。宗教生活とは智慧と慈悲そのものであると言ひ換えてもよいのであります。智慧と

慈悲は、別の言葉でいいますと、高い教智と純粹な愛情です。優れた宗教は、必ず智と愛との兩方面を兼ね具え、しかもちよつと見ると、智は靜かに批判する冷嚴な働きで、愛は暖く何物をも抱き包む許容の働きですから、互に相反するかと思われる方向へ向つているのですが、宗教生活はこの二つを完全に調和し統一しているのであります。

ありのままを知る

まず智慧の方からお話ししましょう。智慧を得るとか、智慧を磨くとかいうことは、如何なることでしようか。宗教

上で智慧とか叡智とかいう場合は、その意味が日常使つて
いる智慧という言葉の意味とは、かなり違つております。

全く違うわけではありませんが、かなりズレています。智慧とは物事の眞實の相^{すがた}をありのままに知ることです。偏見や先入主や迷いや執^{とら}われなしに、物事があるがままに見ることです。といいますと、その位なこととは何でもない、極めて當り前の事で、誰にでもできるではないか、と言う人があるかもしれませんが、實はそれがなかなか容易ではないのです。それさえほんとうにできれば、佛智、無上^{むじやうしやう}正遍智^{へんち}という最高の叡智が得られるのでありましょうに……。なぜそれができないのか。私どもには豫め與えられている先入感があつたり、自分本位の欲があつたりするため、その方に引かれて身勝手に考えがちになるので。物事がその方へ歪^{ゆが}められてしまいますから、ありのままの相を把握するということは、殆んどできないといつてもよいのです。

こういう物語があります。昔、紫野の大徳寺の一休和尚は飄逸な奇行を以て知られた和尚でした。大徳寺の門前に枝の曲りくねつた大きい松がありました。一休は或る時その傍に札を立てて、「この松を眞直^{まっす}ぐに見よ」と書き置きました。これが通りがかりの百姓や商人の評判になつて、「ほう、この松が眞直ぐに見えるのかな」というわけで、右から見たり左から見たり、下から仰いだり遠くから眺めた

り、曲つた松を眞直ぐに見ようとして苦勞しました。しかしその松はどうしても眞直ぐには見えない。そこで百姓達には、「いかに一休さんが偉くても、この松を眞直ぐに見よというのは無理ではないかな、それとも眞直ぐに見える見方があるのかしら」と、半信半疑で噂し合つていました。すると或る朝のこと、その立札に、筆跡も見事に、「この松は曲れり」と書いてありました。一休はそれを見つけてはたと手を打つて、「これは偉い、今時、これだけズバリと書ける者はそう澤山は居まい」と感歎しました。それは本願寺の蓮如であつたということです。この話は作り話かもしれませんが、作り話としても大變面白い話ではありませんか。曲つた松を曲つていると見るのは、最も眞直ぐな見方であるというわけです。それがありのままの相であるというのです。所がひとから「眞直ぐに見よ」などといわれると、それが先入主になつて、見方全體が支配されて、その方へ歪められて、とかくありのままの相を見失つてしまふのであります。

何でもある

それならば。先入主に捉われず、迷いや欲を取り去つて、眺めたときの物事のありのままの相とは、いかなる相でしようか。ありのままとはどのようなことでしょうか。

それは空^{くう}ということ。私どもは日常、何もかも有^あであると思つて暮しているのに、それは假りの姿、迷いの姿で、ほんとうのありのままの相は空である、といへば、ひとは、實に意外だ、というかもしれません。私どもの日常生活では、如何なる物もそれ自らの一定の存在性を持つて存在し、それが變化したり持續したり移動したり消滅したりしている、と考えられていて、そういう考え方の上に世俗生活が成り立つていゝのですから、何物も存在しない、空である、といわれれば、そんなことは信じられない、といつて、驚くより外はないでしょう。

しかし驚くことにはないのです。空^{くう}というのは空虚とか虚無とか空^{から}つぽとか虚^{うつ}ろとか何もないとかいふことではありません。むしろ空^{くう}はおよそそのような消極的な意味とは逆な事態を表わす言葉で、何もない、どころか何でも在る、ということなのです。この點が空^{くう}という言葉が外國語に譯す場合に、苦勞を要するわけで、一應はエンプティネス（英）とかレールハイト（獨）とか譯しますけれども、無論そういう意味ではない。むしろ絶對性（アプソリュートネス）とでも譯すべきです。

空は何もないということではなくて、何でもあるということだと申しましたが、それは何故であるかといひますと、空は別の方面からいひますと、縁起^{えんぎ}ということであるから

であります。空と縁起とは表裏一體なのです。紙ならば表と裏とがありますが、空と縁起には表も裏もない、表がそのまゝ裏であり、裏がただちに表である、というわけであります。縁起とは縁^{えん}によつて生^いじてい^いる、ということ。ですから、いかなる物を取り上げてみても、それはそれだけが獨りで實體性を持つて存在しているのではない。他のすべての物との關係によつて存在しているのである。他のすべての物があるからこそ、そのお蔭で存在することができるのである。だからその一つのものには他のすべてが含まれている。一つには一切が即している——こう考え、こう認識するのであります。例えばこの机の上にある一個の茶碗を取つてみましょう。この茶碗はそれだけで、ただ一つとして、孤立した存在性を持つていゝと考えるのは、日常の考え方です。しかしよく反省してみれば、この茶碗には實に無數の力や働きが加つて、やつと一個の茶碗として今この机の上に在ることができるのであります。山から掘り出された石の粉、それをこね合せた水・轆轤^{りくろ}にかけて形を作つた人の力、窯に入れて焼いた火の力、また出来上つた茶碗を運んで問屋や小賣店へ持つてきた人達の働き、それを金を拂つて買つてきた人の働き……數え上げれば切りがありません。水や火や、賣り手や買い手のどれか一つを取つてみても、そこにまた無限の力が結びついていゝます。ですか

ら、一個のこの茶碗には全宇宙が、全存在が結びついているのです。

一つのを引つれば、一つだけが引き出されると思うのは、日常の人間的な迷妄であります。一つのを引つばると、それに引きずられて、するすると何もかもすべてのものが引き出されてくる、と考えるのが、縁起という智慧です。

西洋にもこれに似た考え方がありません。ある本で、ダーウィンが「自然の連鎖」(生命の網)ということを書いてゐるのを讀んだことがあります。自然の諸事物はお互に相關關係があるという一例として、ダーウィンは猫とクロバーの收穫とが連鎖してゐるといつてゐます。どういふ連鎖かといひますと、猫がゐると鼠が少くなる。鼠が少くなると蜂の幼虫が育つ、そして蜂が澤山飛び立つて花粉の媒介をするから、クロバーが實つて收穫が多くなる、ということです。猫↓鼠↓蜂の幼虫↓花粉の媒介↓クロバーの收穫、こういう連鎖がある、というのであります。(トムソン「科學概論」)

(7) 　　こういう面白い例はまだ澤山あります。わが國でもよくいうことですが、「大風が吹けば桶屋が喜ぶ」といひます。大風と桶屋とどういふ連鎖があるのか、皆さん、この間にうまく連鎖の項を嵌め込んでいつて、大風と桶屋をつなぐ

ことができますか。私も今までそれがわからなかつたのですが、ある本を讀んでやつとその連絡がついたのです。これもまた猫とクロバーの收穫のように、いやそれよりもつと奇抜な連鎖です。大風が吹けば砂や小石を吹き飛ばして人の目を痛める、すると盲人が多くなる。盲人は三味線を習う者が多いから、猫の皮の需要が多くなつてくる、そこで猫が澤山殺されるということになつて、鼠が跳梁ちやうりやう跋扈はつこして、盛んに器物を嚙じる、洗し下の桶をかじる、それ故に桶屋の仕事がふえて桶屋は大繁盛する、というのです。この答は少々どうかと思いますが、藤井乙男氏「諺語大辭典」にあるので、滿更嘘ではないでしょう。これも物というものは意外な所で連關があるという一例です。西洋も東洋も自然の連鎖の中へ猫と鼠を入れているのは御愛嬌です。

賜り物

このように原因から結果へ、その結果がまた原因となつてその結果へ、と進むこと——すなわち因果關係は、縁起の一端ではありますが、それがただちに縁起ではありませぬ。まして、これがこうなつて、その次にはそれがあなる、と順を追うて頭の中で考えていくことは、科學的知識とはいえますが、縁起からはまだかなり遠く離れておりま

す。緣起とは一つに即して同時に全體を知る、一即一切を同時に知るのであります。しかもつねにこの私から始つて、私自らが空（無我）であり、従つてこの渺たる一個の私が一切であり全體であり全宇宙であると知るのであります。そこから自分以外の存在のすべてに及ぼして、いかなるものにおいても全體を見るのであります。これがありのままの相を知ることとて、このような理解を特に智慧と呼ぶのです。ですからそれは本を讀んだり實際に調査したりして、何かについて新智識を得るといふような、頭腦で理解するだけのことでなく、體解することとてあります。智慧を磨くといふのですから、鍊磨する、修練すること、身を以て行するといふ實踐的な修行であります。

しかし因果とか緣起とかは、まだまだ宗教的な直觀や洞察や教智を示す言葉としては充分ではないようです。すべてのものを、如來よりの賜り物、頂き物、恩物として頂くといふことになつて、宗教的知性はいよいよ深まるのでありましょう。世界を佛の世界、如來性の現起として受取るときに深い教智を得ることができるといふ。世界を佛の世界、如來の出現として受取るといふ。世界を佛の仕も感謝も絶對の愛もそこから始まるのであります。

智がそのまま悲

智慧を磨くといふのは、迷いや欲の相對的な自分を超え

て、絶對的な境地に出るのでありますから、この智慧は大智慧といひます。ここで話題は一轉廻して智慧から慈悲へ移りますが、智慧と慈悲とがどういふ關係にあるかについては、充分理解しておいて頂きたいと思ひます。智慧は日常的な自己を否定するのですから、智慧によつてこそ、布施といふ慈悲行も成しとげられ、精進といふ勤勞活動にいそしむこともでき、人を許し人を救ふ純粹の愛も實踐されるのであります。眞のヒューマニズム（人間愛）といふことは、自己の權利の主張からは、決して生まれてこないものであつて、却つて自己の否定から生れるのであります。「無縁の（慈）悲は畢竟、空より生ず」（大智度論）といわれておりますように、何物にも捉われない絶對の愛は、空の智慧から生れるのであります。大智慧に裏づけられた絶對の愛は大慈悲です。消極的な否定の面がそのまま積極的な肯定の面に轉じて、大智慧即大慈悲となるとところに、宗教生活の無限の妙味があるわけであります。

智慧即慈悲であるとか、自己の超越と否定がそのまま絶對愛の活動であるとかいふことは、すべて文化的に高度に發達した宗教の特色でありまして、イエスが人類の罪の贖いのために十字架の上に死して、後三日にして復活したといふ死と復活の教もそうでありましょう。人類に代つて苦しみを受けて死んだからこそ復活したのであります。釋尊

は長い間の戒定慧の三學の修行や六波羅蜜という六つの困難な菩薩行によつて佛陀となり、一切智者となつたのですが、これは大智慧を得たことであつて、大智慧がただちに衆生救済の大慈悲行として働きかけたのであります。釋尊は慈悲の權化であります。

さてでは私どもが自分の力で、この智即悲の難行を實踐できるのでしうか。それもまたこの前、書きましたように、自分の力ではなく、自分以上の力です。自分以上の大きな力が、自分を通して智慧と慈悲となつて働きかけてくるのであります。

近頃紹介された妙好人の一人、奥能登の貧しい農家の婦人、栃平ふじさんの體驗をリズムカルに表現した文字を記しましょう。

○をや（親）さまの、ちい（智慧）とぢひ（慈悲）とを、
いただいて

ねるもをきるも、なむあみだ。

○をやさまの、ほどところすまい（懷住居）と、知らなんだ、
ああありがたや、しやわせじや、なむあみだぶつ。

（鈴木大拙全集第六卷）

つゞく

（大正大學教授）

×

×

×

善き語の勝利

比丘等よ、かく云われて天帝釋はこれらの偈を歌いぬ。

『恐れて忍ぶと、好まば思わしめよ、好まざれば思わされ。』

己利の勝れしものゝ中、忍辱に勝るものなし。

力ありて、力なきものを忍ぶは、

これ最勝の忍辱なりと云わる。

力なき人は常に忍ぶ。

そは無力の力と云われ、その力は愚人の力なり。

力ありて法に護らるゝ人には

反駁の要なし。

忿るものに忿り返すは、更に惡しきことなり。

忿るものに忿り返さずして

戰に二度の勝利を得るなり。

他の怒れるを知りて、正念に己を靜むる人は

自と他との、雙方の醫師なり。

法に無知なる人のみ、その人を愚人と思ふなり』

と。

（相應部 有偈篇十一の一の五より）

信仰に生きる人々

「死生共に煩ひなし」

——遠山ハツさん——



賢 秀 野 昆

浄土誌の編集部から「信仰に生きる人々の話」を書くようにとの報に接したのは去る五月二日のことである。その頃は農繁期であつた、私は昭和十八年の戦争耐な頃から、生活の自立を志しほんの少しではあるが七反歩の田畑を耕し、自作農の一員なのである。田植一ヶ月前あたりからの農村はその準備作業で文字通りの繁忙期なので、二三ヶ月の猶予を願つて置いたのであつた。

斯くして六月の中旬には村落殆んど植付も終つてホット一息ついた同十四日に、十余年前の同信で、現在岩手縣花巻市、国立花巻療養所西一ノ一〇に居られる、遠山ハツさんからの久々の音信である。この遠山ハツは胸部の失患で八年も前から此處で療養されてゐる。十四五年前に両親を失い、相次いで柱とも頼む夫君を失い新婚の夢も束の間、二人の幼児をかゝえて途方にくれ實家に寄生したのであつたが決して生活には恵まれなかつた。幾多の困難と闘い遂に病弱の身となつた。

その頃から私の門戸を叩き、深く浄土門に歸依し熱心な信奉者となつたのである。御両親も生存中當代稀れに見る妙好人で、例月の

教會には夫妻揃つて参聴し何かと萬端援助を惜まなかつた。こうした家庭で育つた遠山さんの入信は、すら／＼と素直に這入ることが出来たのも當然のことであらう。

丁度田植も済んで一安心と云う時に、御手紙を頂いて靜に拜讀して見ると、それは信仰に生きる烈々の金文字である。私は自ら導かれてゐるような氣がしてならなかつた。自然に頭が下つた。何んと云うありがたい尊い信仰體驗だらうと深く感涙に咽んだのである。折も折、浄土誌への約束もあつたので、貴重な紙面を割つて頂いて、遠山さんの手記の全文を左に掲げ、江湖の同信と共に法味に浴したいと存じます。

○ ○

青葉若葉の緑も鮮かな六月も半ばとなりました折柄、師の君様初め皆様には如何お過して御座いませうか。永い／＼間御氣嫌伺もせず全くの忘恩の行爲、何卒お慈悲を以てお許し下さいませ。

郷里を離れて最早八年の月日を送りました今そぞろに過去の御教導が泌み／＼と有難く感ぜられてなりません。毎月五日間の御法話

や、特に五重相傳の御導きは終生忘れ得ぬ感激で御座います。

誰かの本に「信仰は生活を邪魔しないのに生活が信仰を妨げる」とありましたが全くその通りで、時には自らの不明故に招いた境遇の悪さに氣を奪われ、ともすれば世を恨み、人をねたむことの多かつた私の信仰は、全くニセモノであつた事に最近漸く氣付くと云う愚者で御座います。

御存じの通り約二十年前、父母兄弟から、限りなく愛育され、嫁しては夫に愛されつゝも、こうした大恩人をすら眼中になく、我儘勝手な生活をいたし、誰れにも感謝することもなく氣儘放題の振舞で御座いました。今更ながら慚愧に堪えない次第で御座います。腹の底から、自分の悪さに氣付かせて頂きましたのも、皆み佛様の御慈悲の賜であり、師の君様のよくお導き下さいました善縁があればこそと、お懷しさに堪えず遂に失禮をも顧ずお便りを致す次第でございます。

現在では父母も夫もなく、誠に頼りない私ですけれど、幸に身近に居られる療友の皆様方に、それ同様、寧ろそれ以上に愛されて暮

させて頂いて居ります私は幸福者と、心から感謝いたして居ります。

當療養所にも、キリスト教、眞宗、交成會等色々の信者があり、大變熱心に勉強されて布教にも一生懸命です。そしてそれ／＼のグループの方々の睦しきや、お互にお世話し合う有様は、一寸羨ましく感ぜられぬことも御座いませんが、私の淨土宗の信念は、微動だにもいたしません。とも角、皆様とは宗派を越えての親しみを以てお付合い致して居り、それで大變に明朗な生活で御座います。何卒御慈悲をもちまして私の忘恩の行爲を御許し下され、今後共幾重にも御教導お叱り賜らばこれに過ぎた幸は御座いません。御念佛を中心にその日／＼を感謝と誠實とで暮らせて頂きたいものとお願いいたして居ります。

お蔭様で子供等もそれ／＼大きくなりました。長男の明夫も、こんな母であつても大變に面倒を見て良くして呉れますので全く思い残す事もなく、何事でも安心して往生出来る様な心境になつています。

法然上人さまの『生けらば念佛の功つもり死なば淨土にまいりなむ』、とてもかくても、

此の身には思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし』の御法語が限りなく尊く味わはれます。

申上げたい事もまだ／＼澤山ございますけれど後便にゆづりまして筆を止む次第でございます。

師の君様切め御家内皆様の御健康と御幸福を遙かにお祈り申し上げます。

最後に拙き作ですが御笑覽下さい。

× ×

かすみたる遠山脈の見ゆる丘に

せきにきくとふ松の葉 摘めり

天地が萬物育むその如く

父母の愛こそ世の光なり

父の逝きし時幼かりし子が今は

勤めながらに病母はげます。

病む吾と共にけわしき幾山河

よくぞ堪えたり子等はけなげに。

父の亡くて子は生長ちて斯く／＼と

語らん術もなし十歳たちたる今。

おのづから生えるにまかせし小庭邊に

今朝は咲きたりピンクのなでしこ。

以上

ノイローゼ 神経症と宗教



高瀬 廣居

最近の流行病にノイローゼ、つまり神経症がある。新聞廣告は、その治療薬を掲載し、

週刊誌や婦人雑誌はその特集を送っている。

ノイローゼが流行病であるという断定は日本

の場合、未だ難しい。近代病的特性をその素

因にもつていふことは大體確言出来るが、傳

播性のあるものではないので數量的な資料が

明確に把えにくい。だが、どの神経科の醫師

や病院を訪ねても、一日に四―五人の増加を

示していると語っている事は、ノイローゼの

流行性を或程度保證するものであらう。處で

このノイローゼは、人間の精神特に神経と、

心配不安に直接關與するものであるから、宗教に全く無縁のこととは云えないであらう。

現在世界で最も多くノイローゼ患者を擁す

るのはアメリカと云われる。最近では今迄内

科醫に診療されていた患者の八〇%が、神経

科の療法をうけているとの事で、まさに、ノ

イローゼは、近代機械文明の異常な發達を内

包する魂のない大陸アメリカに集約された觀

がある。この事は、ノイローゼ疾患が、何等

かの意味で、社會環境に對する個人生活の不

適應性が齎す葛藤に原因があるということ

予想させよう。

不斷に進歩、發展する近代社會の激しい競

争や、鎬を削る適者生存の争い、生活の基底

部を與える經濟的政治的條件の變化は、神経

の安まることを許さぬ都會の喧騒——ジャズ

・高層建築・マスコミュニケーション・車兩の

洪水・誇大な廣告・合理的科學的なるものの

強調等々——音響地獄——と共に人々の神経

を弱め抵抗の力を磨滅されてゆく。この無意

識の裡に弱められた神経は斷えず焦立ち、不

安感を感じる様になる。それは人間精神にと

つて當然の歸結でもある。そしてノイローゼ

の原因が、戦争の危機感、資本主義的自由競

争、職場か結婚かの撰擇等にあると云われ、又コングが、云う様に「個人は世界との絶對的——拘束的な解除不可能な共同體の中に置き据えるところの客體——世界と結ばれた關係機能」にあるが故に、ノイローゼは今日「個人的な願笑危懼、希望——野心などの神經過敏なエゴイステイックなもつれや葛藤でなく現代の重大問題に直接關連する葛藤」を意味するならば、まさにこれは近代病と云えよう。刺戟、興奮から不安へ、その不安が、招來する無意識の心的障害。この障害を除去しようとする心の葛藤、やがて襲ってくる生活戰線からの離脱に焦つて混亂してゆく疾病。それが、ノイローゼである。それは現代病といわれても、余りにも私達の周圍に日常にみられることではないだろうか。

近代は吾々に「抑制」という美德を強いて來た。それは、文明の恩恵に浴した近代人の生んだものだが、人々はこの倫理の前に、卑屈な忍従を勇氣に變え、禮讓と讃え、煩瑣な「文化生活」を以て、人間性の原則と見做し人間の自然性を握殺する處に寧ろ人間らしさを認めようとした。近代から現代へ、この倫理は益々定式化し、形式が内容を律し、結果が原因を支配し、法律が道德を、道德が魂や良心を規定し、觀念が生活を壓迫した。自然に生きんとする人間の営みは悉く生物的動物的範疇に驅迫され、假面の紳士たらしめるべく育て上げられていつた。行動的人間は、思慮の缺けたものとして嫌惡されて來た。しかし、いかに、社會道義や、法理の綱が精密巧致を極めようととも人間のもつ、本來の自然性（深層心理學の云う無意識界りの働き）を抹殺し去ることは不可能である。人間關係の複雑さや職業的交流の煩雜化は、人々の心を疲勞させるだろう。だが、その半面、人々に根強く土着的に固執しているプロメテウスの叛逆は、その火を消す事が出来なかつた。（この火こそ、又フロイドの云うリビドーであり

エンクの云う集合體意識である）その憤懣が反抗であり抗議である。又、憎惡である。近代社會の狂躁性と、現代人の抑制倫理。この兩面の壓力こそ吾々の心をさいなんでゆく現實である。人々はこの進歩と抑制の二面に挾

撃されその激突の前に混亂してゆく。その混亂をとらえて自己のうちに「何故」「どうしてこうなんだらう」と、到達點のない摸索を續け、疑惑にみちた生活に投げ出され、やがてそれに忠實にかかわつてゆく限り、えられなくなつてゆくであらう自分を熟知しつつも熄む事なく原因を採つてゆく。ノイローゼ患者は皆そうである。しかし、求めてゆく自分を支え、不斷に摸索という精神の放浪にせきたててゆくのは何の力であらうか。云う迄もなく自己の良心の自然性が要求する反抗の力であり、葛藤のエネルギーなる純粹な生命本能であらう。そして社會のもつ現代的営みや倫理に痛めつけふみのけられつゝも反抗し續け、不可能を可能にしようとする努力、社會環境に適應してゆかねばならないと思ひ込む社會的自我と、適應を拒否する個人的自我の板挟みに苦斗する意志は人間精神の純粹性に根差しているものである。清濁併せ吞む太い神經をもつことの出来ぬ純なる心、良心こそノイローゼ疾患に冒される近代人の重要なエレメントであらう。然も、ノイローゼ患者が

その原因を社會的な面にもちながらも疾患として現われる時は極めて、個人的、個性的、性格的である事は、この人間精神の個體的純潔性に深く關係ある事實を明白に物語つていよう。この關係が、同時に宗教と密なる所以でもある。

宗教は、あくまで個の問題であり、個としての自己の精神に關わるものである。そしてどの様な苦難も自己苛責も、自己の問題として終始する處にその際立つた特質がある。私達がノイローゼ疾患におかされないのは、あらゆる問題を、余りにも自己に忠實に、己れの精神の際みにひきすえて思量せず、内向的にならず寧ろ、外向的に解決してゆく點にある。そして又宗教心の深添は同様の状態に由るのである。極めて宗教的な人は内向的、沈潜的である。人を傷つけて却つて痛むのは自己の心であり、競争にうちかつて悩むのは寧ろ自分のエゴイズムの醜さである。外界の事象財を悉く己れの精神の場にひきすえて苛責し罪惡を意識する姿こそ求道の本質であらう。「常識」のもつ限界にふみ止ることの出來

ない精神、矛盾を矛盾として受容出來ぬ、嚴密の精神、それは、宗教の本來性であると共に、近代病ノイローゼの次元であらう。だから、宗教精神が不斷に苦難や練忍を求め惡意識に目覺めてゆくと同じ様に、ノイローゼ患者は純一や調和を計れない心的葛藤(conflict)を繰返している。親と子、姑と嫁舊世代と新世代、上役と部下、社會と家、の對立や衝突が齎らす葛藤が、救いのない解放の道の閉された形で反趨されてゆくのが疾患者の常態である。

フロイドは、ノイローゼとは「相煩煩するふたつの心的歎念群の積極的な相互的反抗の產物」であり「人間は衝動の營みが提起する諸要求と、それらの諸要求に反對して人間の内部に起つてくる抵抗との間の葛藤のため」に罹ると云つてゐる。こうありたいと願う自己とそれを拒む自我、その煩煩、友に理解されたいと希いつゝも、それを果し得ない焦立ちと葛藤、悩める人間とは皆この「煩煩」や「葛藤」の持主であらう。この葛藤から逃れんとする努力や志向は、パスカルによれば慰

戲となり、氣晴らしとして宗教に赴く事が多い。

宗教に求めない人々は——多くの人はその症狀が病的であるため宗教に求める事は少いのだが——神経科に心理療法を求める。本人の心理的生活史を尋ね抑壓している事柄をうちあけさせてゆく表明法。何か忘れようとしているその忘却對象物を除いてゆく除反法。自己分析をさせてゆく洞察法、その他支持療法、訓練療法、自由連想など、いろいろの精神療法——精神分析——が行われる。そして一人の患者は、數年間病院に通わねばならぬ。

こう云つた治療の實態をみても、それが宗教に無縁ではないのである。表明法などは、一種の懺悔であり、カトリックでの告解である。そして佛教に於ては、禪に於ける自己分析は洞察法であらう。(夏目漱石の作品にててくる參禪はこの事實を物語つていよう)淨土教でも「念々稱名は常に懺悔」(善導大師般舟讚)なのである。更にヤスパースによれば、神療法は暗示による精神分析、暗示によ

らない療法、そして第三の人格に訴えにわけられ、この第三の方法は宗教家の任務ではないかと云つてゐる。勿論アメリカのプロテスタントの如くこの類別を徹底化し殆んど精神の悩みを精神分析醫に任せ、超現實的問題の教會の關與する問題と割切つてゐる宗派もあるが、今日我が國での新興宗教の發達が、殆んど精神療法的説得に據つてゐる事を考える時、ヤスパースの言葉は、宗教家の一考を要すべき點であらう。そして、佛教教團の職業化を防ぐ爲にも、佛教人が魂の技師たる自覺にたつ意味からも、積極的に取りくんでゆくべき問題ではなからうか。

原因、症狀、治療とこの三點からみても、ノイローゼ疾患は、その近代的様相を帯びつゝも人間の本質に結ばれた問題として宗教と直接の關係をもつものである。新興教團が、病氣を治すという現世科學的な低級さを賣りものにしてゐると非難する前に、宗教活動の社會性の深い認識にたつて、この神經疾患の社會的、個人的因子を除去すべきであらう。ニイチエは人間を規定して、「無限の可能性

を」という無規定性は人間を不安な無秩序の中に置く。人間が孤獨を味うのはこの不安と無秩序の齎す無規定性の中にある」と述べてゐるが、この無規定性こそ、個人にあつては自我への過信であり、社會にあつては科學文明への過度の依存であらう。それはニイチエの云う様に、必然的に孤獨と不安を招く。優れたヨーロッパ知識人は西歐文明からの逃避を試み、文明の論理を不條理とし東洋的思性——佛教的無——に回歸せんとしている。無規定性の願望は、人間の本源的なものであるだけにその招來する結果は悲惨である。ノイローゼ患者の精神の純粹さはその純粹さの故に却つて願望の強靱さに於て抑制との軋レキを強めてゐる。フロイドの弟子アドラーは、「われ／＼のいう處の人間觀照・人間認識といふことの意味は、人間の傷つける、驅り立てられた、そのくせ無力な『神たらんとする努力』の齎らす教への迷誤から人間を救い出す」ことだと云つてゐるが、宗教家の出發點も又然りであらう。

現代社會の齎らす合理主義・劃一主義・人

間の機械的平均化、そう云つた合理的なものへの過度の一面的強調は、ユングが云う様に、「憂うべき平衡喪失を意味」する。そして、「かつては宗教が人間の心の、従つて人類文明の平衡を保つて」いてくれたが、現代人は神を否定し、理性と人間能力に無規定的であるが爲に、絶えざる不安と自己喪失を繰返さねばならなくなつた。原水爆の製造を平和の保障とする人々は、同時に死の灰を怖れてゐる筈である、この矛盾が生む葛藤はノイローゼの不斷の原因であらう。

自己意志による抑制や、社會的、倫理的抑制の力を失つた現代、そして人間の自然性を持續する人間の本根的無規定性、それこそ、現代文明社會の業苦であらう。そして、この葛藤と苦汁に満ちた恐怖を、即ち、人類の、人間のノイローゼを救い、平衡感覺と秩序の回復こそ、今日の宗教の課題と云えないだらうか。(元NHK宗教放送擔當)

× × ×

愛嬌のある幽霊

梅 津 和 夫

もうだいぶ前に聞いたことなので、家の名は記憶していませんが、東京もはずれに近いところの、あるお茶屋にあつたお話です。

〇 〇 〇

このお茶屋の二階に、ちよつとこざつぱりとした六疊の部屋がありました。

しかし、不思議なことにこの部屋だけは、どんなにお客がたてこんでいても、決して使わないようにしてあつたのです。

そして、いつもこの部屋の床の間には、必ず可愛らしい笛が飾つてありました。

たゞそれだけなら、別に何の不思議もないのですが、夜もふけて、ちやうど一時頃にな

ると、きまつてこの部屋から、美しい笛の音が聞こえてきたというのです。

見たという人の話では、床の間の眞ん中に實に可愛らしい小人のようなお、か、め、さ、ん、が、

チョコンと行儀よく座つて、笛を吹きながら見た人の方を向くと、ニッコリと何ともいわれぬ愛嬌のある顔で、笑つてみせるのだそうでした。

〇 〇 〇

ところがある日、この話を聞いたKさんという飲ん平のお客が、

「今の世の中に、そんな馬鹿げた話があつてたまるもんか。よし、俺がそのお、か、め、さ、ん、の正體を見届けてやる。」

め、さ、ん、の正體を見届けてやる。」

といふだしたのです。

「俺も行く。」

と、これも酔つぱらいの若者が、三人できあがつてしまいました。

女將や女中が眞面目になつて止めるのも聞かないで、問題の部屋へ押し上げると、飲めよ唄えの大騒ぎです。

「お、か、め、さ、ん、が出たら一パイ獻じて、一曲所望しようじゃあないか。」

Kさんがこういふだせば、若者達も、「そうだ、ついでに踊りも拜見させ

ていたところ。」

口から出放題に、勝手なゴタクをならべていました。

やがて夜中の十二時もいつか過ぎて、お約束の一時近くになりました。

女將や女中がゴソ／＼と降りて行つたのを見ると、

「間拔けな奴らだ、幽霊が出てたまるもんか。」

四人は顔を見合せて、大聲で笑いました。

皆は何の異状もなく、飲むほどに、酔うほどに、いよくもつて大得意になつていつたのです。

「何だ、何だ。何も出て来やしないじゃないか。今日はおかめさんは、他所行きか。」

「十日も前から約束しておかにやあ、來てもらえんのだろう。」

「とにかく間拔けな話だ。」

「オイ、明日から皆に會つたらいつてや

れ、もうこの家にはお化けは出ないとなあ。約束の一時がきても、おかめさんはサッパリ顔を見せませんでしたとな。ヘンざまあみろ。」

四人はもう、ペロ／＼に酔つぱらつていました。

だが、その時です。

一人が『アッ』と叫んだかとおもうと、ベタツと腰をつきました。

それもそのはずです。

床の間を見ると、そこにはお待ち兼ねのおかめさんが、笛を持つてチョコンと座つていたからです。

そして、うつ向いていた顔を静かに上げると、皆の方に向つてニッコリと笑つてみせました。

『アアアア……………』

四人はすっかり青くなつて、腰を抜かしてしまつたのです。

どうして階段を降りたのか、三人が重なり

合つて、下の帳場へ轉がり落ちて來ましたが一人として口をきく者もなく、たゞブル／＼ふるえているばかりでした。

そして彼等の跡を追うように、いとも妙なる笛の音が流れてきたというのです。

○ ○ ○

このお茶屋が、現在あるのかないのか、よく解りません。

又、このおかめさんがどのような過去をもち、どうして化けて出なければならなかつたのかも、その笛のいわれとともに、うかつにして聞きもらしてしまいました。

けれども、随分幽霊の話は聞きましたが、

どれも大抵似たりよつたりのものなのですが、その中でこの話だけは、大變愛嬌のあるようで、それでいて誠に不氣味な話として、いつまでも頭の中に残っているものゝ一つです。お盆の頃ともなると、いつもこのおかめさんの話を想い出しては、そつと合掌してみたくなるような氣持にさそわれます。

めぐり來た

悲劇の思い出



杉本 信雄

人間が発見した第二の火といわれる原子力が、最初に原子爆彈の形をとつて、地球上に現われたことは、人類の文化史上最大の不幸であつた。しかもそれが、廣島つづいて長崎と、十年前の當時、世界に二個しかなかったものが、二發ともわが日本の本土にさくれつし、廣島だけでも二十八萬という、日露戦争で日本軍が失つた將兵より多い数の死者を出したのである。その中には、いたいけない幼児、動きにとれない老人も數多く含まれてい

た。この事實は、それがアメリカがやつたからどうのというのでなく、この人道無視の行爲に對しては、廣島市民いや日本人は、大乗的に怒りを燃し、再び人間が、このような無恥無道なことを繰返さぬように、人間本來の姿にかえり、平和への運動を展開すべきであろう。そこで、八月六日、十度めぐり來る廣島原爆記念日を前に、十年前どのようないきさつから原爆が投下されたか、そしてその残した『惡魔の爪跡』と今に至る迄尾を引く原

爆病の悲惨さを、恐れることなく見つめながら、平和を世界へ聲高く叫ぶ「權利」としたものである。

終戦間もなくのアメリカの公式記録によれば、廣島の死者は七萬八千五百五十名、負傷者三萬七千四百二十八名、行方不明一萬三千八十三名、長崎の死者七萬八千八百八十四名となつてゐる。これは、日本人に與える精神的打撃を少くするためと反米思想を封じる方便に使つた數字と見られている。昭和二十年七月、日本に對し、原爆使用を決定するにあたり、トルーマン前米國大統領や米國の最高幹部は、廣島の住民を四十四萬名と計算し、半分以上の死者を想像したという。しかも後を引く原爆被害の非人道性と未曾有の破壊力を持つ原子力の解放による今後の人類の運命が手中にある責任感で悩んだという。また原爆製造に立合つた科學者は、戦争目的のための原爆に強く反對した。しかし『原爆使用により、太平洋戦争の終結を早め、米軍將兵と日本國民の莫大な生命の損失が避けられる。したがつて原爆使用は妥當である』という、目

的は、手段を正當化するという、一片の論理で、あわれにも日本國民はその犠牲になつたのである。しかも、この考え方は、まだまだ米國の指導者の見解でもある。いま叫べばれている原子力の國際管理の重要性と、それに対する道徳的な反響とを、はかりにかけてみて、後者の方が重い場合は、原爆を使用しない。しかし、前者が重い場合は直ちに使用すると、アイゼンハウワーは考え、更に、米國の平和的意圖にかかわらず、米國を攻撃するものがあるならば、米國は子女防衛のため、いかなる兵器でも使うべきであると聲明しているのである。

それと共に、當時の世界狀勢はそれだけではなかつた。一九四五年三月マリアナ諸島からの日本の諸都市に對する大爆撃が開始される以前に日本の海軍は既に大部分壊滅していた。更にフィリピンからの撤退により日本への石油輸入は完全にとだえ、軍事生産力は海上封鎖にともなつて急低下し、日本の立場は絶望的となつた。そこで、同年五月初旬には、最高戰爭指導會議は、戰爭終結の方法に

ついて討議し、ソ連を仲裁者として平和を求めることを決定している。このように日本の敗北は原爆を投下しなくとも明白な事實を、すでに示しており、それが單に時間の問題であつたことについて、米戰略爆撃調査團は次のような結論を下していた。『たとい原子爆弾の攻撃がなかつたとしても、日本の制空權確保によつて、無條件降伏をもたらし、かつ上陸作戰を不要ならしめるための充分な壓力を發揮し得た。たとい原子爆弾が投下されなくとも、たといソ連が參戰しなかつたとしても、さらにまた上陸作戰が計畫されず、企圖もされなかつたとしても、日本は一九四五年十二月三十一日以前に必ずや降伏したであろう。』

ところが、これより先四月五日、ソ連のモロトフ外相は期限切れを理由に、日ソ不可侵條約の不延長を日本に通知、極東へ兵力を着々集め、滿州に於る日本軍主力に對する攻撃を計畫していた。このソ連の動きをキャッチした米國は、ドイツの降伏以來、すでに芽生えていたソ連との冷い感情から、ソ連の機先

を制し決定打としての原爆投下を取てしたものと見られている。この點について英國のブラケット教授が『恐怖・戰爭・爆弾』の著書で『原子爆弾の投下は、第二次大戰の最後の軍事行動であつたというよりもむしろ、目下進行しつつあるソ連の冷い外交戰への最初の大作戰の一つであつた。廣島と長崎とに、原爆を急ぎ投下したことは、その政治目的がすべて完全に達成されたという意味では、決定的な成功であつた。』といつてゐるように、人口密度と日本の戰意をくじくのが、目的で選ばれた廣島と長崎（長崎の場合は小倉が第一目標であつたが、天候のため長崎に投下された）の市民が、軍事的犠牲になつたというよりも、一九四五年三月ごろから既に現れてゐた米ソの對立の政治的犠牲になつたのだと考えられるのである。このいきさつが誠であることは、戰時中ルーズヴェルト及びトルーマンの兩大統領に仕えたり、米國海軍元帥も暗に認め、同じく米國の評論家ノーマン・カズンズ氏も一九四六年六月十五日等で土曜文學評論で公けにしているのである。

このように我々日本人は、現在も形を變えてであるが進行している「冷い戦争」の痛ましすぎる犠牲となり、一瞬にして広島、長崎を、歩みにじられたのである。その結果として、広島だけでも四十四萬人あまりの人口の約七割近い三十八萬名が、親を失い、子をとられ、即死したり原爆症で次ぎ次ぎに死んでいったのである。このほか現在生きている人たちの中にも、放射能障害のため、外傷は受けてなくても身體の調子が悪く、正常な労働ができないで苦しんでいる人が少くない。調べによると、放射能による再生不良性貧血、あるいは骨髓の造血機能障害による眞性多血病のため、広島で六千人、長崎で三千人が治療を急がねばならない現状となつてゐる。これは兩市による公式の調べであり、調査の行届かない者を含めると、兩市合せて一萬名は越すものと見られている。ところが實際に治療を受けている者は、僅に五百名にすぎない。他の患者にくらべ少くとも恵まれてゐるこの五百名の人たちは、どのように治療されてゐるであらうか。

広島に最初の原爆が落された朝、岩本優枝ちゃんが生れたばかりで、市の東のはずれ、爆心地から三キロ離れた矢賀町の家に寝てゐた。當時は別に被害も受けず、元氣に成長して、小學校に通うようになった。ところが、昨年の初めから工合が悪くなり、食慾もなく白血球はどんどん減つて行つた。同年二月十五日入院して、手當を受けた結果、六月三日退院までこぎつけた。ところが間もなく再び悪化し、八月二日再入院したが、醫者の手當でも空しく、十月二十三日遂に不歸の客として短かい一生を閉じたのだ。このような現實が、次ぎ次ぎ引起されて行つたにもかかわらず、終戦後七年間の占領中は、原爆問題に觸れることをタブーとしてきた。それに合せて日本人の忘れつばさ、諦めからか、原爆被害を地震や水害のような天災的なものと考え、傾きがあつた。しかしこれは、自分がまねいた罪ではないのである。入院すれば少くとも一カ月に内科五萬圓、外科二萬圓、眼科一萬五千圓はかかつており、岩本優枝ちゃんのように再生不良性貧血には毎日または隔日に四

百ccの輸血が必要で、一人十萬圓から二十萬圓近くかかつてゐる。さらに、問題は金の面だけではない。ケロイドなどのために結婚を斷念する若い女性、就職できないで泣いてゐる青年の實例は數知れないほどである。これらの『惡魔の爪跡』は、永久に日本に残つて行く、原爆關係の學者も、その製造を命じた政治家や軍人も、原爆の瞬間の威力や數學のデーターは、百も承知してゐるだろうが、それらの人たちに人間の生活をどんなに慘忍に底の底までつき落し、長く破壊しつづけてゐるかを、充分知らせる必要があるのだ。

二發の原爆ですら、斯くの如き惡を人類の上に投げかけた。ところがそれにもこりず、人間は原爆の何十倍かの威力を持つ水爆、あるいは地球を壊滅させるコバルト爆彈、細菌兵器を造るのに余念がない。二十世紀に入つてから、人間の行使し得る自然力が急に強大になつた。そして人間は科學によつて自然を征服して來たと信じた。あるいは自然力を人間が制御してゐるとまでいう人がでて來た。ところが、人間の意圖を達成するために使わ

れている筈の自然力が、人間を大量に殺す兵器となり、更には人類を破滅させるガンともなつて來た。これは科學が発達し、専門化するに従つて、その成果がばらばらになり、科學が全體として、人間の智慧の有機的な一環であるという本來の姿が消されたためである。これは正しく人間性の敗退である。古代インド、古代ギリシャは偉大な智慧を持つた個人を生んだ。そしてそれらの古代人の偉大な智慧はその時代を平和に住みよくして行つた。ところがこの偉大なる智慧は、現代人の中にはすでに見出すことができず、個々の人間からはみだしてしまつた大きな知識の集積に壓倒されそうになつてゐる。そして今日の社會はもはや少數の個人の智慧だけでは救えない。人類文化の長い歴史に動される「悪い行きがかり」の様相を示している。しかし科學が一部の人々のための力でなくて、萬人のための力となり、萬人を幸福にする智慧の一つにする努力を捨ててはならないのである。その意味に於ても、故アインシュタイン博士は、二十七年十月『日本國民への私の聲明』

と題して、原爆の悲劇を二度と繰返さないようにとの祈りをこめた便りを、日本に寄せてきたことは、科學の上に立つべき人間の良智を説くものとして注目されるべきである。故アインシュタイン博士は、最初の原子爆弾製造に協力した一人といわれているが、この感想文の中で、その時果した役割について『原爆製造の可能性を調べる研究をすべきだという手紙を、ルーズヴェルト前大統領に送つただけだ』とその立場を明かにし、『現代に於ける最大の偉人故ガンジーは、人間というものが、正しい道を知り得た場合に、いかなる大きな犠牲にたえられるかということについて、實證してくれている。インドの解放のために、ガンジーがなしとげた仕事というものが、一見絶對優位であるかに思われる物質的な力よりも強いということを立ててくれる生きた證據なのだ。』と説いている。さらに七月十日には故アインシュタインの遺言に基づいて英國の哲學者バートランド・ラッセル博士はじめ湯川博士を含む、世界的學者八名が主要六カ國首脳あて、原子戦争の禁止を呼び

かける聲明を發表した。また十五日には、第五回ノーベル賞受賞科學者年次大會で、十八名の科學者が世界各國に對して、政治上の目的から原子力戦争に訴えることのないように呼び、世界の破滅を救う唯一の方法は、人間本來の智慧をとりもどすことであると力説している。更に昨年八月六日の原爆記念日から、原水爆禁止署名運動が全国的に繰繰げられ、アメリカ、インド、イギリスなどの共鳴者と手を握り合つて活潑な運動を起しているなど、内外の核兵器禁止の動きはよろこばしいものがある。

(毎日記者)

お願い

會員のたよりをどし／＼お送り下さい。
御意見・ニュース・感想等何でも結構です。取捨は御一任下さい。

宛先……東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人讃仰會

淨土へのたより係

宗教人

ハイライト

以 上 人 (上)

大 橋 俊 雄

一

江戸時代の浄土宗は徳川氏の外護により香花御宗門として一大發展をとげ、寺院の建立増加を見ると同時に、浄土宗に志す僧も漸く多く、江戸幕府の宗教政策は寺院存立の上に経済的にも制度的にも安定せしめられたのであつたが、此の安定度が宗門に附與されたことによつて、教團内には安佚の風がみなぎりはじめて來たのであつた。教學の研究はすすめられたけれども、未熟な域を出でない形式的なもので新鮮味に缺け、例へ僧侶を志し檀林に掛錫すると云つても、檀林は資格を得るための學び金にしかすぎず、其處では學僧の

講義があるが、學成り故國に歸つてからの心準備に秘かに宗典の虎の巻を筆寫する者さえ居つた。「選擇集講錄」一本を手によれば、本書には選擇集研究上必要な問題は全て網羅され、文を解釋するに詳しく、加うるに引證經論章疏の卷數を示す等至れり盡せりの親切さは、此の一本さへ持たば選擇集講義には事缺かないという便利さのために、縁山學寮に席を置いて秘かに筆寫に懸命だつた人も多かつた。僧侶たりと雖も、寺院にあつて布教や念佛勸化に従事するでもなく、唯檀徒の布施によつて安逸遊隨の生活に其の日その日を過していた僧も可成りに多くありはしたが、心ある僧はこれを遺憾とし、頗る嚴格に心行を策勵し、絶へず警策を加へつゝあつた。捨世

地にあつて念佛勸化に一生を捧げられた僧や持戒念佛を標榜した律僧は、香衣の色にのみ誇ることなく、肉山に住することもせず、只ひたすらに念佛行を行じ、教學に布教に先覺的態度を示した人達であつた。日課念佛六萬遍にして、尙これを以て足れりとせず、百萬遍念佛を修せんことを發願し、天井より大念珠をたれ毎夜單身深更に至るまで稱名にふけつた教意の如き、又わずかに身を入るるに足る箱をつくり、周圍に釘を打ち、手のみ出せる程の圓窓を開いて鉦をうちながら策勵念佛した辯頭も亦口稱念佛行者であつた。

二

去りぬる日、東山の一心院に詣でて稱念上人の墓前に回顧をすませて後、以八上人の御消息を拜見したことがあつた。この書翰は一心院の九世信譽福阿に宛てたもので、信念こまやかに文面にあふれ、讀む人をして自然に襟を正さずにはおかぬ道念のこもつた、しかも念佛行にあふれ、口稱念佛に徹せられた姿をよみとれることの出来る尊い御消息であつた。

尊躰御安全に御座候哉

時に御念佛之砌想像而已

貴院境界多□少尊意ニ

カナヒ申サヌ事モ御座あるべく候

又却厭欣之御助縁かと存じ候

誠以先書ニ如有依心依

處ト誠候、此言サテモ拙子事元來御慈悲をクハヘラレ候、不思議ノ

御宿縁難有奉候間トテモノ

御事ニ御身煩ナカラ稱念之

刻ハ必不倦御回向之薰力

奉馮外無他候、私事モ乍恐

御回向申上候、身雖遠心不遠

離トカヤ常ニ御ナツカシク奉存斗

カ、ル妄念フカキ凡念即生之

本願不思議ニアヒ奉り候事かなと感

涙ヲモヨラス時モ御座候、別義御座

なく候ヘトモ好便モタシカタク、又御

床敷奉存候まゝ御披覽ノ御造

作ヲモカヘリミス慥愚札候。

豈後有長迷

南無阿彌陀佛

所詮奉期一蓮候耳

十一月十四日

拜呈

稱阿尊宿

禪室下

專求西(花押)

此の消息をのこした以八上人こそ袋中良定上人の實兄であり、捨

世の流儀をしたい念佛を全國に勸化した行人であつた。

三

みちのく岩城の里では、「さんやまち」の信仰が深く行はれていた。この信仰は月天を供養して、その功德によつて延命長壽・罪障息災・家門繁榮を願おうとするもので、十五日廿三日は其の有縁日とされていた。その日にはきまつて、月々にかかすことなく月天子に、子なきことをうれい、祈願をこめていた一組の男女があつた。その人こそ以八上人の父母であり、その願いはかなつて、天文八年（一五三九）男子の出生を見たのであつた。

月天子は勢至菩薩の化現といはれ、上人また幼なくしていたずら事を好むことなく、出家學道をのみ願ひのぞんでいたために、人は勢至菩薩の申し子と呼んでいた。十一才の春父母も、こゝまま邊土におさえつけておくのも忍びず、叔父の龍満寺存洞のもとに送り弟子となし、名を有易と改めたが、一を聞いて十を知るほどの彼は、更に師を求めて大澤圓通寺に修學することとなつた。圓通寺は名越派教團の檀林で、學徒は北關東を中心に掛錫する者多く、宗學の研鑽につとめ、傍ら一般佛教の研究に志したが、更に深く道を求めんとする彼の心念は、當時自旗派教團の人師の中でもその名を一世にとゞろかした名匠道譽貞把上人を生實大嚴寺に訪うたのであつた。しかし彼の求めたものは修學のみではなかつた。出離の要道は學問によつてのみ成就されるものではなく、念佛行を修する所にこそ本意のあるこそを悟つた存易は、此の一行こそ我にあたえられた勸む

べき行であるといつて、廿八才の夏兄弟達に

佛法修行はいかにも攝心、五十年も三十年も閑に工夫思案するが第一なり。世間をば打すつる心もちにて思案一片に心をなすべく候。たとひ悟道得法するとても、修行なくして打すてば自理を失ふべく候。其用心肝要に候。されば古人も悟道は易く修行はかたしといへり。

と置文し、師席を辭して、念佛弘通の旅に出られたのであつた。

(つづく)

F. F. D. 特選幻燈機

14,500 圓	マスター S300 100V 300W
24,800	マスター・ルツクス 100V 700W 冷却装置付
16,500	エルモ 100V 300W
14,500	ニコレット C 型 100V 300W
48,000	デラックス 75V 750W

本會代理取次

會員にかぎり一割引にて、御取次致します。
一報カタログ送ります。(荷造送料 500 圓)

軍 將 尼

泉 湛 田 鶴

旭將軍木曾義仲が、壽永三年正月二十日、粟津野で流れ矢に當つて果てゝから、早や三ヶ月余がすぎた。當時、鎌倉には、義仲の嫡子志水冠者義高が三年前から人質となつて來てゐたが、賴朝は長女大姫の聲と定め、姫同様に寵愛してゐた。

が、義仲が、朝敵の名にかゝつて討たれてしまつた今日、遣兒義高を、どう處理するか大きな問題となつて來た。聲ではあるが、其のまゝにうちすてゝ置くことは出來ないと考へられた。十六の少年ながらも義高は、聰明な上、弓馬の道にも父の名を恥しめぬほどすぐれてゐた。その上、義仲の遺臣が、義高をもり立てゝ行く懸念が十分あつた。が、目の中に入れても痛くない程寵愛してゐる大姫の歎きを見るいとしさを思ふと、賴朝も、義高を處斷するといふことは容易に決心がつきかねた。

ところが、近頃一時離散して諸國に漂泊してゐた義仲の一族舊臣が、義高を盟主と仰いで旗擧げを企てゝゐるとの風聞が頻りとなつて來た。

かうなれば、由々しきことである。

幕府の將來の安泰のためには、政畧の前には、賴朝や時政は決して私情におぼれなかつた。

智謀豊かな義高は、何を考へ何を企てゝゐるか、推し量り難いものがある。後顧のうれいを斷つため、木曾にゆかりの者は生かしておけぬ。不憫なれど討つにしかずと賴朝は、腹心の武士堀藤次にい

ひふくめて義高を誅せんと圖つた。

このことを密かに伺ひ聞いた大姫の侍女は、姫に事の急を聲ふるわせて告げた。

「え！」

と、失神するばかりに驚き、わな／＼とふるへながらも氣丈な大姫は、（今は一刻も猶余はならじ。お逃し申し、罪は自ら受けん）と一計を廻らして、義高に女装さし被衣をかぶつて姫の女房達に圍ませたとられぬやうに、夜の明けぬうちに、曉闇をついて館を脱出せしめた。

かねて隠し置いてあつた駒を引き出して、義高は跨り一鞭あてると、疾風のやうに駆け出した。

姫は、蹄の音を耳にすると、

（首尾よく落ちのび下され……）

と無事の脱出を心に祈つた。

信濃以來のお傳役として義高に付き添つて來てゐた海野小太郎幸氏は、冠者と同年配であり、弓にかけては他に並ぶものない腕名手で、日頃、座右にあつて片時もはなれなかつた。弓馬の相手をなし、又、義高の好きな雙六の相手を朝暮なしてゐた。

義高の身替となるためあとに残つた幸氏は、人目を欺くために帳臺に入つて義高の振りして、衣を被つて鬘計りを枕に出し獨り雙六を打つてゐた。

そのため見廻の番士も、

「いつもおすきな雙六に打ち興じられてゐる」

と、何等不審を起さなかつた。

初めて不審を抱き初めたのは、灯ともし頃であつた。

いつも日課としている調馬にも姿を見せぬときは腑に落ちぬ。もしやと思つた番士は、内を改めてみると、義高の姿はなく、幸氏が帳臺にゐる。

「オヤ」

「憎き奴目、われ等をたばかるとは」

驚き怒つた番士は、幸氏の襟がみをつかんで引きづり立てようとした。すきを見て幸氏は、見事に喉を突いて自害してしまつた。

この報告を聞いた頼朝は、秘密が事前洩れ義高が逃走したと知ると、不快と怒りに言葉も荒々しく、

「早く跡を追へ、義高を討ち取つて來れ」

と、堀藤次親家に嚴命を下した。

一方駒に鞭を加へた義高は、岳や田畑や、野や森の風物も目にも入らず駆けに駆けつけた。鎌倉街道から武藏國へ入つて入間川原に落ちのびて來たときである。手兵を卒つた堀藤次の郎黨藤内光澄が追ひ付いて來た。

討手の姿を見た義高は、父の名を恥かしめてはと、（もうこれまで）と馬首をもとして打つてかゝつた。が、多勢に無勢、所詮敵ふはづがなかつた。追ひついめられ敢なし討たれて首級を擧げられてしまつた。藤内は鎌倉に歸つて、義高の首を頼朝の見參に入れた。義高の誅せられたことは、秘中の秘としてひたかくしにかくしてゐた。

半ば不安ながらも無事に木曾に逃れ着いたであらうと信じてゐた大姫は、義高が打首になつたといふことを感知すると、魂を消すばかり驚き、心は亂麻のやうにかきみだれて、身を悶え泣き崩れた。

姫の心を和らげようとして來た頼朝の姿を見ると、

「あんまりです父上は、私の幸福は、父上に蹂躪されました。何の恨も憎しみもない義高さまを討つなんて卑劣です」

泣き腫らした目を向けて、押へきれぬ怨みの言葉で父の無道を責め立てた。尙も、狂つたやうに父の悪たいを並べたて、罵つてやまない。

理に伏して、慰める言葉もなく頼朝も當惑げに頭を垂れてゐる。

それ以來、大姫は、夜も晝も悲嘆の涙に顔を泣きぬれて、悲しみのため食事も咽喉へ通らず、日に日にやつれて終に病床についてしまつた。

二

一度び義高暗殺の報が傳はると、これを怒つてかねてから蠢動して機曾を窺つてゐた甲斐信濃の木曾の殘黨、一齋に蜂起を企てたのであつた。

かゝることもあらうと、用意してゐた頼朝は、少しも驚かず、直ぐ討伐の軍兵を派遣することゝなつた。

足利義兼、小笠原次郎長清を甲斐の國に發向めしめ、又、小山、宇都宮、比企、河越等の御家人を信濃國へ向け、この總大將として侍所別當、和田義盛を當らしめた。

この外、相模、伊豆、駿河、安房、上總の御家人が召集され、各地から馳せ參ずる軍兵で鎌倉は群れあふれ、進發を控へてざわめき混雜してゐた。

やがて間もなくこの騒ぎが鎮まつた頃、義高誅伐の殊勲者であつた堀藤次親家の郎黨、藤内光澄が斬られてしまつたのには、鎌倉中の人々も、啞然として、驚かざるを得なかつた。

義高が討たれて以來、哀傷の余り床に臥してしまつた大姫は、日に日に悲しみが深まり、寢れ瘠せて氣も狂つたやうに、「義高さま」「義高さま」と口ばしつて殿中の人々の同情の涙をそゝつた。殿中には笑聲もなく、いつも沃鬱な空氣にとゞゝれてゐた。

仲睦かしかつた日を想ひ、乙女心の一途に大姫は、うつろな心にとゞ義高の佛を思ひ浮べ、目には何の希望の輝きもなく頬はいつも涙にぬれてゐた。

これほどまでに、心から義高を戀ひ慕つてゐる大姫の清廉な愛情に胸を痛めた母の政子は、

「ことの子細を姫に洩らさず、この擧に出たのは余りな御仕打、姫の氣持を一體どうなさらうとするお考へですか」と、頼朝をなじつてやまない。

頼朝も今となつては頭を悩まし、顔には苦悶の色がうかゞはれた。

姫の心情に同情し、深い嘆きも尤もと思つた政子は、姫の心を慰めるには、

「義高どのを討つた武士を首にすれば、少しは姫の心も靜まるも

のを」

と、責任を親家の罪に歸して、頼朝に藤内の成敗をしきりと迫つた。

妻には頭のあがらぬ頼朝である。日頃、政子には一目も二目も置いてゐた彼である。

さすがの頼朝も、政子の言葉に敵しかね、家庭の内紛に堪へかねて、

「姫の一命のためには、やむを得ぬ」

と考へたのか、忠誠な功臣を斬罪に處するといふ矛盾を取てしてしまつた。

三

「姫はいづくぞ」

臥床に姫の姿が見えないので、頼朝は侍女に訊いた。

「御堂におわします」

「何、又、あすこへか」

淡い嘆息を洩らした。

其の後の大姫は、南御堂で一人でちつと祈念をこらす日が多かつた。今又、憂鬱な氣分を治さうと二七日の參籠の願を思ひ立つてゐた。

二七日の祈願も、明日満願になるといふ前夜、文治二年五月廿七日の夜、姫は靜御前をひそかに御堂に召し呼んでゐた。

骨肉を分けた兄弟といふに、淺ましい相剋のため頼朝と不和とな

り、追討の身となつて所在をくらましてゐた義經の行方を詮議するため、靜は母の磯の禪尼と共に鎌倉に呼び寄せられてゐた。

都きつての舞の名手、又なき容色の持主と麗名の高い靜とはどんな女か、たかゞ白拍子の出といふに、判官義經のため貞操を守つてあらゆる苦難にもめげず、けなげにも生き抜いてゐる悲劇の主人公に、同情と尊敬が集つて、鎌倉中は専ら靜の噂で持ちきつてゐた。

去る四月八日、頼朝夫妻も鶴岡八幡の社殿の廻廊に靜を召して舞はしめた。その時、靜は頼朝の前をはゞからず義經への火と燃えた慕情を歌ひつゝ紅涙をたゞへて毅然として舞ひ終へて一層の評判を高めた。

靜のかうした噂をきくにつけても、姫は、靜に一度會つて話したいと思つた。女の眞實に生きる靜の氣持は、姫は自分が一番よく分るやうな氣がした。

「靜といひやるか」

靜の容姿を見守つて、親しげに聲をかけた。

「ハイ」

「姫のため、そなたの舞を一さし見せてたも」

「つたなきわざを」

羞らうて立ち上ると、涼しい美聲で歌ひながら舞ひ初めた。

目にしみるやうなあざやかな舞に、姫は、とけこむやうに恍惚と見とれてゐた。靜も、姫の心を慰めんものと、心ゆくまで舞ひつゞけた。姫の瞳にも、たへて見ないよろこびの色がうかがはれた。姫には、又とない楽しい一夜であつた。

それから數ヶ月の後のこと、身重であつた靜の産んだ男子が處置されたと聞いた姫は、

「おゝあさましや、むごいことを、余りな無慘なお云ひつけ」

肌に粟を覺え、蒼白になつて目をうるませた。

かねてから、生れる子が若し女子ならば、靜に與へて都へ歸してよいが、男子であるならば後顧の憂を斷つため、不憫ながら襁褓の内にあるうちに命を斷つべしといひ渡されてゐた。

幸か不幸か、靜の産んだ子が男子だつたので、命によつて安達新三郎は、ひしと初孫を抱いて放さぬ磯の禪師の手から奪ふやうに抱きとると、由比が濱に駒を走らせ、さすがに神佛に詫びつゝ兩眼とちて海鳴する荒磯の波のしぶきの中に投じてしまつた。

それをきくと、氣も狂つたやうに髪をふりみだして磯邊に走り寄つた靜は、

「和子よう、和子よう」

と、暗い沖へ聲をかぎり叫びつけ、聲をからして泣きぐずれてゐたといふ。

四

涙にくれ涙に明す姫の病床の生活は、一年や二年の間ではなかつた。

床に伏せてゐなければ、佛間に引き籠つて義高の靈に、花を捧げ香をたいて送る日が十年余も續いた。

時たま氣分のすぐれた時に、自らすすんで行ふかりそめの外出も

義高の菩提を弔ふためであつた。屢々岩殿の觀音に參じて義高の冥福をひたすら祈つた。其の他の社寺に詣でゝは、亡き人を思ひつゝけた。

姫の綿々たる愁嘆を少しでも慰めんものと、母の政子は、志水冠者の佛事を盛大に行つた。頼朝は頼朝で姫の氣鬱に心痛して、當時功驗無雙といはれてゐた相模國日向藥師に病氣平癒を祈り、又、持佛堂を新たに造営したりした。

或は、青葉もゆる御方山際に於て、多くの美女を召し、歌の節面白く田植を行はしめ、又、御家人の若者のうち藝能あるものを召して、笛、鼓、歌曲を競はしめて、ひたすら姫の心を慰めんとした。

かうして、頼朝はあらんかぎりの力をつくして姫を慰安しようと思ひしたが、一向姫の心に満足を與へず、心中には、いつも義高の姿が明滅してゐるやうであつた。

夜具の襟はいつもぬれ、只涙の中に慰めを求めてゐるやうであつた。ために、宮中は常に一抹の憂雲が漂よい。花やかな宮中も、姫にとつては、希望も楽しみもない憂愁の牢獄にひとしかつた。

義高が殺されてから十一年目の建久五年八月のこと、姫の健康がやゝ快復してきたのを見て、

「良き良人を添へたら」

と、さすがに我が子には子煩悩であつた頼朝は、姫の行く末を案じて妹婿、前中納言藤原能保の子高能の許に嫁がせようとした。

この話をする、姫は顔色を變へて、

「いやです」

くやし涙を一杯にためて、父の言葉を耳に入れようとしなない。

宥めすかして強いてすゝめようとすれば、

「女の操を汚さんよりは、淵瀬に身を投じてしまひます」

と涙で拒んで、眉には凡ならぬ色がりかゞはれた。

歲月のたつにつれ義高のことを忘れて高能であれば嫁するであらうと思つたのに、二夫にまみえる心のなかつた姫の貞節心は金石よりも堅かつた。

義高を慕う姫の切ない情愛には、蠻骨の鎌倉武士でさへ涙をそゝらずにはゐられない程であつた。

果しない悲嘆の涙にくれてゐる姫に對しては、頼朝も策がなかつた。これに懲りてか夫妻は、縁談を二度と口にする事はなかつた。

姫にとつては、ただこれ政畧のみしかない境遇が悲しまれた。姫は、一人ぼつちの道を歩む思ひであつた。

五

かうして姫のことで頼朝の愁の濃い眉を、一層曇らせることが勃發した。

それは、都では豫期しない政變が起つたことである。大納言通親といふ思はぬ強敵が現はれたことである。通親は稀代の政治家で、己が嫁を宮中に入れ丹後の局と策謀して頼朝の支持してゐる攝政兼實を、終に失脚せしめた。前の攝政近衛基通が再び攝政となつて、宮中の實權は兼實と變つて彼の手に移つて行つた。兼實の失脚と共に、娘の宜秋門院も宮中を退くの余義なきに至つた。

政變に驚き廟堂の形勢の推移に深く憂慮した頼朝は、京にゐて頼朝の片腕となつて活躍してゐた藤原能保に、幕府の權威の回復と政局の打開につとめしめたが、何等策の施しようもなかつた。廟堂は、全く幕府と協調の態度を捨てゝしまつた。このため頼朝が氣をもんで躍起となつてゐる最中、姫の病氣は急變して來た。

建久八年七月十四日、義高のことを一日も忘れることもなく、追慕の悲しみに堪へ婦道を堅く守つて清い香を放ちつゝ、愛情に殉じてしまつた。病に伏してから丁度十四年目、父頼朝の死の二年前であつた。

頼朝夫妻の落膽、失望はいりまでもない。とかく悪いことは重なるもので、同じ年の十月には、京都鎌倉の連絡の機關として、かくことの出来ない要地を占めてゐた頼朝の妹婿前中納言能保が急逝して、形勢はますます鎌倉に不利となつてきた。

頼朝は、形勢の挽回に次女乙姫を入内せしめようと種々運動を試み、入念に準備をととのへ、さて上洛しようと思つてゐる矢先、宿望も叶はず、あわれ彼もぼつくり逝つてしまつた。

晩年には頼朝の計畫も、とかく喰ひ違ひを生じ萬事意の如くならず、家庭の内紛と混み合つて、一段と、心に焦慮を加へてゐたらしい。

幼い時から波瀾に揉まれた頼朝は、鋼鐵のやうな意志によつて霸業を成し遂げたが、晩年には健康を損じ、英雄の末路にあらがちな神經質となり、一寸した出來事にも神經を惱まされ、とかく物に驚き易くなつてゐた。

頼朝の死の原因には、かういふ話が傳つてゐる。

稻毛重成の亡妻は北條時政の娘で政子の妹であつたが、彼が亡妻追福のため庶民の便益を計るために、相模川に橋を新たに普請したとき、その橋開きに頼朝が臨んでの歸途、丁度八の原に來たとき行く手に行家、義經の亡靈が突如現はれ、更に、稻村崎の海上には、安徳帝を始め奉り、平家の一族が幻となつて浮び、呪ひの聲が聞える思ひして身の毛もそりだち驚きの余り卒倒して落馬したといふ。これは前年の十二月のことであつたが、歸館してから病にかゝり、終に正治元年一月十三日、五十三才で逝いた。

かの秀吉でさへも臨終の際には、信長の亡靈に詰責せられ、その半身を蒲團の外に轉げ出してゐたといふ。

これを思ふと、善導大師が發願文に「願くば弟子等、命終の時に臨んで心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身心にもろくの苦痛なく身心快樂にして禪定に入るが如く」といつてゐるやうに、悔ひなき一生を終つて平和な死を待つ靜かな態度に大きな意味が肯づけられる。

頼朝の薨去によつて世の無常を感じて夫を追慕の余り落飾した政子は、時に四十三才であつた。

六

頼家が鎌倉二代の主となつて間もなく、幕府に起つた重大な出來事は、二女乙姫の死であつた。かねてから乙姫の入内はほゞ約定されてゐたので、頼朝の遺志を遂行するため幕府は、乙姫の入内を取

り行ふとしてゐた。が、乙姫は蒲柳の質で、健康も勝れず病勝ちで藥餌に親しんでゐた。

父頼朝の死に逢つて心に大きな衝動を受けたゝめか、忌中もあけた三月五日、急に容態が悪化した。

心痛した政子は、詣處の社寺に祈願せしめ、又營中に於て一字金輪法を修せしめて、ひたすら全快を祈つた。

百方手をつくしても姫の病は依然として快方に向はず、日追つて憔悴し萎え衰へて來たので、時の名醫針博士、丹波時長を招聘しようとして京へ急使を立てた。が、時長は、何故か固辭して承諾しない。幕府は、更に上皇に願つたので時長も上皇の命によつて鎌倉に下つて來た。

乙姫を診察した時長は、朱砂丸といふ一種の強壯劑を獻じた。これは靈藥と見え、一時危まれた姫の容態を持ち直して、日増しに頬に血の氣をもどし、いさゝか食事さへ摂るに至つた。營中は初めて眉を開くことが出來た。

ところが、翌月の十二日になつて、目の上に腫が出來たのを見て時長は凶相と驚き、

「今となりましては、人力のつくし得るところでございませぬ」と、匙を投げ、最早や絶望である旨を告げた。

營中の憂色は濃く、寂として水底に沈んだやうである。

都で専ら入内のことに奔走してゐた掃部頭親能が、姫危篤との報に馳せ歸つて來た。親能は姫の乳母の夫であつたが、親能が歸るとその翌日時長は倉皇と京へ歸つてしまつた。

六月三十日、政子の看病の効もなく、入内の歡びをもつた未來に富む十四才の若い生命の糸が斷たれてしまつた。

目の前に榮達の門を空しく見てのこの不幸に、母としての政子の歎きは、いかほど泣いてもつきなかつたであらう。乳母の夫婦部頭親能は、落膽のあまり世を捨て、宜亭法橋を戒師として出家してしまつた。

七

大姫について夫頼朝の死、それから乙姫と、つゞいて味ふた現實の世の無常は、人間誰でも持つ悲しみと同じく、政子をも暗澹として果しない悲しみに追ひやつた。

頼朝でさへ時には頭の上らなかつた事さへある氣丈な政子も、堪らない淋しさに馳られて行つた。

姫の遺品の種々を見る度に、ありし日の姫のことが想ひ出され、もう姫や夫に、この世では再び逢ひ得ぬ淋しい愛別の苦しみを切實に味つたのだつた。

こんな不幸が重なつて來ると、まことに人生の流轉は計り知れないものである。源氏も、平家の跡を追つて同じように亡んでしまふのではなからうか、かうした不安に馳られずにはゐられなかつた。生々しい人生の經驗に、さすがにどうすればよいかと迷つたものらしい。政子が、法然上人に淨土の法門を訊いたのはこの頃で、正治二年の頃であるといはれている。

かねてから、上人に歸依してゐた政子は、蓮上房尊覺を使として淨土の法門をたづねた。

上人は、詳しく返書を認めてから述べてゐる。

「念佛の功德は、佛も説きつくし難いと述べられてゐて、廣大な善根であつて、源空など申しつくす事が出來ると思はれませぬ。未法の世になつて、佛の法みな失せてのちの人々には、たゞ念佛ばかりが、現當（この世、先の世）のいのりになります。このゆえに、來つて往生の道をたづねる人には、一すぢに專修念佛をすゝめて居ります。

念佛を申すことは、さまざまの義がありますが、たゞ大字をとなふるなかに、一切の行はおさまつてゐて、心には本願をたのみ、口には名號をとなへ、手には念珠をとるばかりです。身口の不淨をきらはない行であつて、たゞ心をきよくして申すを第一の行と申します。この世の財寶の乏しい人には、力を加へなされよ。もしすこしも念佛に心をかける人には、いよくおすゝめなされよ。それも彌陀の本願のみやづかひと思し召されよ。返すがへすも專修念佛を、現當（この世、先の世）のいのりとは申しまする」

かうした意味の普信を差し上げて、念佛こそ、後世のみでなく、現世の安に穩に通ずる道であつて、彌陀の本願のみやづかひと考へる政事をとることこそ、爲政者の心構であることを懇切に教示したのであつた。

上人の普信は、政子のなやみをほぐし、寂しい胸の裡をあたたかくした。念佛の教へに大きな纏るものを見出したのであつた。

其の後、頼家が修禪寺で死し、實朝が横死を遂げて源氏の血統絶えるに至つたが、左大臣道家の子息、頼經が迎へられて將軍となつた。頼經が僅か三才であるため、將軍が幼少の間は、政子が簾中にあつて政務の決裁を行ふこととなり、名實共に鎌倉幕府の棟梁となつて、政事の表に立ち、世に尼將軍と仰がれるに至つた。

施本に

浄土トラクト

B6版
十六頁

竹中信常著

正信へのみちびき

三版出来。非常な好評で各方面に利用されております。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の全信仰の結晶たる一枚起請文をば、懇切に解説せられてある。

法然上人讃仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得おくべきことがらが、教義から行事作法に到るまで明示されている。

定價一部十圓、○十部以上八圓、送料十部毎八圓増○五十部以上七圓、送料五十圓○百部以上送料當方負擔

後記

○増上寺の池の蓮が、まわりと對照的にきれいに咲いている。都心には珍らしい立派さ。

○發行所移轉より三ヶ月、やつと軌道に乗りはじめた。本號より新しく宮林昭彦、水谷哲雄、梅津和夫の三君がスタッフに加わる事になった。思えば、今まで、なしたくても果し得ない事が多かったが三君のはりきりぶりは、たのもしい。どうかよろしく御願ひします。

○本誌挿入の返信用葉書は、何によらず本會へ御便り下さい。編輯の上記事に致します。(眞野)
○本號が皆様の御手許にとどく頃は、舊盆もすみ、秋の彼岸の準備と云つた處でしようが、でも本誌は八月號!!折角、秋風と共に御健闘をお願い致します。

○九月號以降の編輯會議は、汗の中にも涼しさを感じる八月二十日、竹中先生宅で開かれた。先生

眞野(龍)・梅津に小生の面々、編輯の抱負を談論する。この結果は内容、加えて、月刊誌の使命である期日發行と共に現れて來ることでありましょう。

○先をばかり急ぐのではありませんせんが、追われる身から追う身になりたく、それは二ヶ月も三ヶ月も先の事を考え、そのみに追われている雑誌編輯の悲しさでもありますが――努力しております。(水谷)

○過日宗務所に於いて、宗務長初め課長、各部長に、編輯員一同がお會いする機會を得た。席上、七百五十年御忌の諸事業に併せて、本會の發展についても、更に一段の御配慮を下されとの由。會員各位の御援助と、ともに、これは大きな御力添え。有難き次第。

○トラクト「正信へのみちびき」三版が出来ました。一時賣切で、多數の方々に大變御迷惑をお掛けしたことを深くお詫び致します。

(梅津)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三十年七月廿五日印刷
昭和三十年八月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常
發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人讃仰會

東京都品川区上大崎一ノ七八二番
電話 東京八二一八七番

念珠司

岩田圭秀商店

東京都豊島區巢鴨二ノ五〇
(とげぬき地藏尊後・染井墓地入口)

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ットで、堅牢安全な遊具を納入・好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 12,000
銀ブランコ3人乗	¥ 14,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付